図画工作教育講座１　《　授業力　》

この講座の狙いは、教師としての授業力を付ける　　まず　　小学校教育実習時の授業力
そして　学校現場で即戦力としての授業力

そのために
教師として、何を知っておくべきか
教師としての指導力をこの講座で身に付けてほしい。

では、子どもにとって「授業」とは
①　分かる　しかも　楽しい　　目指す授業像はこのパターン

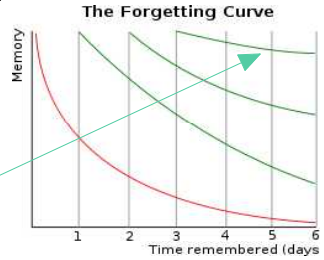
しかし、現実にはこんなパターンも
②　分かる　でも　楽しくない　　例えば、漢字や計算ドリル・持久走の練習

③　分からない　でも　楽しい　　例えば、４年生の理科・空気に体積があることを調べる授業で、
運動場で説明をしてビニル袋に空気を集める実験が、風船飛ばしや鬼ごっこに。
授業後、子どもに「どんなことが分かった？」と尋ねたら「えーと、う～ん、楽しかったです」

④　分からない　しかも　楽しくない　　こんな授業が続けば、学級崩壊の恐れ大！

教師の工夫で　楽しくない　→　楽しい　　分からない　→　分かる

②の漢字や計算など、「定着のための作業」は「少量と繰り返し」がコツ。
例えば１年生の漢字
「木」←５回も書けば覚えるのには十分。１行全部使って書くのは無駄だし楽しくない。
難しい漢字は意味づけしながら→２年生の漢字「親」を例に。（立っている木の下で見ている人）
記憶が薄れかけた頃にミニテストで刺激を。少量と繰り返しで学習が定着する。
持久走は視覚化・ゲーム化やポイント制で楽しくなる。
視覚化・ゲーム化→６年生なら長崎修学旅行コース・マンネリ化したらポイント３倍日などの工夫で。



エビングハウスの忘却曲線

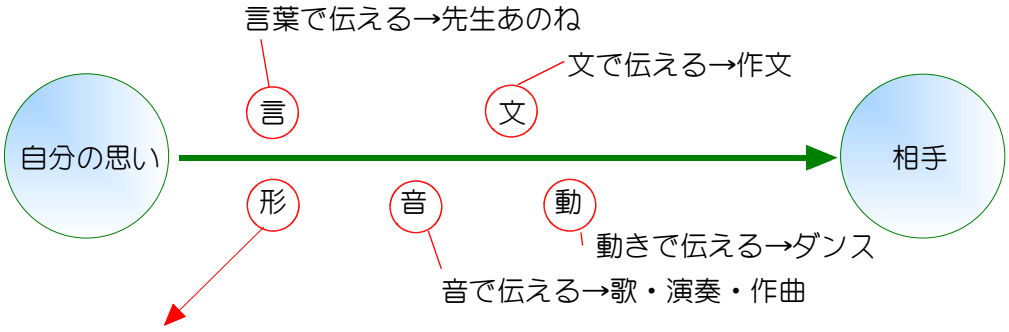
要注意　学力を付けるためにと、やっていることが逆効果になっているのは、
罰としての漢字ドリルなどの作業

学習とは、本来、分からないことが分かる
出来なかったことが出来る楽しいこと。
楽しいはずの学習を、苦痛なものに変えることは、教師が自分の首を自分で絞めているようなもの。

③の授業のねらいを運動場で説明した理科の授業は、なぜ失敗したのか？
原因＝導入段階で教室外の音や動きなど様々な刺激に子どもの注意力が拡散した。
対策＝導入を教室内で、その後に運動場へ。
授業のねらいをしっかりと把握させれば、必ず分かる授業に。

では、本論に

図画工作の授業とは、自分の思いを相手に伝える「表現力」を育てること



１本の線を引くだけで
自分の思いを伝えることが出来る

このことを
子どもに実感させることが
図画工作教育のはじめの１歩

レポート　ノートに丸を二つ並べて描いて、鉄の玉とシャボン玉にして下さい。
塗りつぶしたりフワフワとか擬態語を加えないで、１本線の丸だけで。
隣の人に見せて判別できたら合格。

（終了後）

実際には、子どもたちにこんなふうに言います。

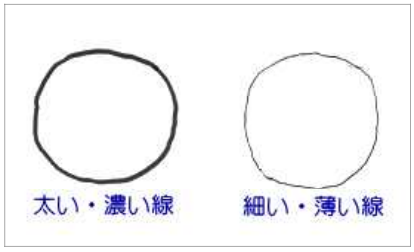
先生は今から黒板に「鉄の玉」と「シャボン玉」を描きます。

先生が何も言わなくても、黒板に描いた二つの玉が「私が鉄の玉だよ」「私はシャボン玉だよ」って超能力でみんなに教えてくれます。よーく見ててね。（超能力という言葉に子どもは反応！集中力アップ）

（黒板にゆっくり描いて、子どもたちに問う。）

そうだよね。この鉄の玉を描くときは「重い重い鉄の玉だよ、落としたらドスンってすごい音がする鉄の玉だよ」って思いながら描いたから、この丸が『私が鉄の玉だよ』ってみんなに教えてくれたんだよ。

シャボン玉を描くときも「ふわふわと飛んでいく薄くて軽くて触ったらすぐ壊れてしまうシャボン玉だよ」って思いながらそう～っと描いたんだよ。だから（後略）



思い を 線の強弱 で表現できることを実感させると、教師の言葉かけ、助言が変わってくる。

「心を込めて描いてね」

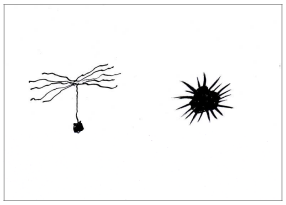
心を込めるって
どうすればいいんだろう
意味　分からん

「お母さんの柔らかい髪にしてね」
「ブルドーザーのがっちりした線は・・・」

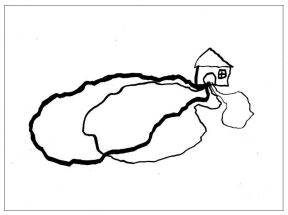
↑具体的な言葉かけになる

しかし、線の強弱による表現力は、実感しただけでは子ども自身の力として定着しない。
子どもの興味関心を高めるいろいろなパターンで

「手の力＝技能」を確かなものにしていく必要がある。
「継続は力なり」続けていくことが技能を確実なものにする。



＊（柔らかな綿毛の線表現）
タンポポの種が大きくなってフワフワと飛んでいくんだ
＊（ピッと尖ったイガの線の表現）
栗さんは食べられちゃ大変だとイガイガをたくさん付けました



＊（強・中・弱の線表現）
カタツムリの散歩
お父さんはのっそりのっそりとお散歩を
お母さんはゆっくりゆっくり
赤ちゃんはそお～っと

図工教育講座の評定について（１回目の授業の中で、全員が最も真剣に聴いていた８分間）
評価項目は　①理解　→　筆記テスト２回（中間と終了時）授業さえ聴いていれば簡単
例えば、「鉄の玉とシャボン玉を描きなさい」
授業を聴いていなければ、さっぱり分からない問題
②意欲　→　毎時間提出の簡単なレポート　　内容に応じて３・２・１・０点加点
③出席　→　レポート提出で出欠確認　　点呼は時間の無駄なのでしません
この３要素を以下の数式で評定します。

テスト（中間（１００点）＋期末（１００点））÷２　＋レポート点　－欠席点　＝秀（９０点）・優（８０点）・良（７０点）・可（６０点以上）

欠席　１回　病気や急用など不可抗力としてノーカウント
２回（－４点）　３回（－８点）　４回（－１６点）　５回（－３２点）
６回以上は、学内規則１４条（出席が２／３に達しない者）に該当

※１５回の講座が全て修了後に行ったアンケート
「あなたがこの講座で学んだ中で、最も重要だと思ったことはなんですか？」

＊　鉄球とシャボン玉の描き分けが最も私の印象に残っている。最初にこの題を出されたときは、どうやってどのように描けばよいか全く分からなかった。しかし、線の表現によってその絵の持つ雰囲気がガラリと変わってしまっていたのがとても興味深かった。
　私自身、中学３年まで絵の教室に通い、油絵・水彩画・ステンドグラス・版画などいろいろやってきたが、鉛筆１本の描き方の強弱を付けて、様々なものを描き分けるというのをこの授業で知ることができた。

＊　図工の座学ということだったので、理論をひたすら聴くような授業かと思っていた。こういう経験を基にした実践的な授業はとても面白いと思った。

＊　私は絵が苦手だったので、美術の時間はあまり好きではありませんでした。だから、これから教師にな

ったら、絵の指導は必ずあるので、とても心配でした。しかし、ポイントを押さえて教えることで、絵の苦手な私でも、少しは子どもたちに教えることが出来るのではないかと思えるようになりました。こう描けばよかったのかと、毎時間驚きます。もっと早く小学生くらいのときに教えてもらっていれば、もう少し苦手意識は少なかったかもしれないと思うと残念です。

＊　子どもが図工を通して自分なりの思いや考えを絵に表現することを楽しんでもらいたいという考え方がとても印象に残った。図工は絵がうまい子の独壇場になりがちな，絵の描き方を学ぶ授業だというイメージが強かったので，その考えを変えることができた。
　教師は、ただ絵がうまく多くの技法を知っているだけではなく、理想の教師像とは何か、じっくり考えてみるよい機会となった。

＊　「教師は画家を育てるのではなく、子どもたちの『絵心』を育てるのだ」ということが最も重要だと思いました。私は今まで、多分，画家として育てられてきたのだと思います。これはこの講義を受けて気付いたことです。この講義で、絵心を育てるためにしてはならない指導だといわれた指導を，私は受けていました。それ故に、作品では技能やクオリティ・相対的な完成度を求めていたところがあります。
　この講義で、図工は絵描きを育てる教科ではないと聞いたとき，衝撃でした。つい求めがちな技能よりも大切なのは、子どもが『自分の思い』をどれだけ表現できたかということに重きを置く。その方が子どもたちも自由に、プレッシャーも恥ずかしさも抱えることなく、のびのびと図工を楽しめるなと、改めて思いました。

＊　私は絵が下手で工作も得意ではなかったので、小中学校の９年間かけてだんだんと自分の中で「図工は苦手」とコンプレックスを築いてしまった。しかし、大学生になってこの講座で「図工楽しい！絵が苦手でも十分楽しめる！」と気付いたので、私がこの授業で楽しいと思ったことを将来児童たちに積極的に与えていきたい。自分が苦手だったからこそ，苦手だと感じる子の気持ちがよく分かるので、その気持ちにより添って適切なアドバイスを与えられる教員になりたい。

＊　私がこの授業の中で最も重要だと思ったことは、児童を第一に考えることです。私は教育学部に入ってから様々な教科の授業を受けましたが、ともかく自分の勉強で手一杯で，あまり児童のことを考えた学習ができていなかった気がします。
　しかし、先生の授業を受けて，先生という仕事は児童生徒の成長のためにある。そして互いに成長し合っていけるということに改めて気付かされました。先生が毎回見せてくれたいろいろな子どもの作品、黒板に描く絵など，大学生ながらすごく面白くて楽しかったです。絵の具を水に薄める実験なども生徒に強い関心を持たせると思いました。
　私も教師になったときは、先生のように生徒を第一に考え，楽しく子どもたちと成長していきたいです。

＊　カタツムリの散歩が印象に残っている。私はこれまで、豊かな表現力を児童に身に付けさせるためには、単調でつまらなくても教えなければいけないと思っていた。しかし、線のコントロールや線の強弱など一見単調なことでも、工夫によって楽しく教えることができると分かったからである。